



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Catherine Maire, De la cause de Dieu à la cause de la Nation : le Jansénisme au XVIIIe siècle, Paris, Gallimrd, 1998, 710p
Author(s)	床井 啓太郎
Citation	西洋史論集, 3, 76-84
Issue Date	2000-03-08
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/37431
Type	departmental bulletin paper
File Information	3_76-84.pdf



Catherine Maire, *De la cause de Dieu à la cause*

de la Nation: le Jansénisme au XVIII^e siècle, Paris,

Gallimard, 1998, 710p.

床井 啓太郎

はじめに

一八世紀フランスにおける王権と高等法院のあいだの対立の構図は、財政問題、宗教問題とからんで世紀をつうじて継続するが、世紀中葉に深刻な政治問題として顕在化したのがジャンセニスムをめぐる抗争であった。ジャンセニスムをめぐることは、すでに一七世紀から、カトリックの教義についてイエズス会とのあいだに激しい論争を巻き起こしていたが、この争いは、一七一三年に発せられたジャンセニスムを弾劾する教皇教書『ウニゲニトウス』をきっかけに、高等法院と王権をまきこんで政治の舞台にのぼった。

こうしたジャンセニスムをめぐる諸問題は、我が国における従来の研究では、宗教上の問題をめぐる政治的闘争と理解され、一八世紀における王権と高等法院の一連の闘争という文脈の中でとらえられてきた^①。このため、宗教上の問題としてのジャンセニストとイエズス会のあいだの闘争と、政治闘争がどのような過程で結びついたのかという

問題については問われてこなかった。フランスでは、今世紀半ばにエドモン・プレ克蘭が、「宗教的」ジャンセニスムから「政治的」ジャンセニスムへの変化を、伝統的に認められている「革命的精神」の増大と結びつけたが、こうした考え方は、絶対主義時代を貫く、「立憲主義」的思考と絶対主義のあいだの絶え間のない闘争という文脈にジャンセニスム問題を位置づけるという形で、近年のアングロサクソン系研究者の研究に結実した。

このような歴史認識に基づく、近年の、最も優れた業績の一つとして、デール・ヴァン・クレイの研究が挙げられる^{②③}。ヴァン・クレイは、一八世紀高等法院におけるジャンセニスムを「ジャンセニスム、ガリカニスム、高等法院の立憲主義という要素からなるあいまいなイデオロギー・ブロック」として扱った。また、革命の政治的起源を、一五七〇年代から八〇年代における暴君放伐論から一七七〇年代から八〇年代に高まる愛国派の運動に至るまで続く絶対主義と「立憲主義」の闘争に帰し、ジャンセニストと高等法院という「イデオロギー・ブロック」の王権にたいする闘争を一連の闘争の流れのなかに組み込むことによって、ジャンセニスムの特殊性を解消しようと試みた。さらにここでは、暴君放伐論にみられる「契約」のアルカイックなモデルを、ルソー及び革命が想定した集団的主権に基づく契約の萌芽とみなし、高等法院の「立憲主義」の端緒を宗教分裂時にまでさかのぼることによって、暴君放伐論において志向された貴族による「代議制」と「立憲主義」の連続性が強調されるのである。

本書はこうしたヴァン・クレイらの解釈にたいして、一八世紀にお

ける王権の動揺の原因を絶対主義の構造とその強化自体がもたらす矛盾の増大におき、ジャンセニスムが、絶対主義の外部に存在する抵抗運動ではなく、あくまで絶対主義の枠内においてそれを矛盾に追い込んだ運動であったことを示そうとする。その際、一八世紀という固有の政治状況と結びつけたこの時代のジャンセニスムの独自性を、(一)「旧約象徴論」figurism、(二)「真理の証言」Témoignage de la vérité」という観点から検証し、この神学的特徴がいかにして政治的闘争と結びつき、闘争の性質自体を規定したかを明らかにしようとしている。本書の構成については以下の通りである。

導入

第一章 ルネサンス≡ウニゲニトウス≡教書にたいする闘争

第二章 死に瀕した宗教：コンヴァルシオン派

第三章 政治的变化：高等法院の闘争

終章

本書は、(一)小さな聖職者のグループが教皇の断罪に抵抗し、いかにして最終的に巨大なプロバガンダ機構を組織するにいたったか、(二)コンヴァルシオン派の熱狂の構造、(三)王権との対立関係における高等法院の戦略、という三つの大きな契機における力学の構造をそれぞれ各章で検証している。本稿では、一において、本書一章、二章に基づきジャンセニスムの神学の性質と一八世紀における宗教闘争運動の高揚の関係をまとめ、二において、本書三章に基づきジャンセ

ニスムをめぐる宗教闘争と一八世紀における政治闘争の関係を整理し、本書全体の紹介に代えたい。

註

(1) 我が国におけるジャンセニスムとそれに関わる研究としては以下が挙げられる。『ウニゲニトウス』問題からモープールの改革まで政治闘争の側面から概括的に追った、木崎喜代治「18世紀におけるバルルマンと王権」(一)(二)(三)『経済論叢』一三五巻、五・六号、一九八五年、思想運動としてのジャンセニスムの歴史的意義を明らかにしようとする研究として、飯塚勝久『フランス・ジャンセニスムの精神史的研究』(未来社、一九八四年)

(2) Edmond Précis, Les luttes politiques et doctrinales aux XVIIe et XVIIIe siècle, dans A. Fliche et V. Martin(éd.), *Histoire de l'Eglise depuis les origines jusqu'à nos jours*, Paris, 1955-56, t. XIX, 2 vol.

(3) Dale Van Kley, *The Religious Origins of The French Revolution. From Calvin to the Civil Constitution, 1560-1791*, New Haven, 1996.

一

ジャンセニスム運動を総体として神学的にいかに位置づけ得るかという問題については、宗教戦争の時代から現在に至るまで、ジャンセニストとその敵対者の系譜を再構成し、思想の系譜に埋め込むという方法が一般的である。すなわち、バイウスからジャンセニウス、サン・シラン、アルノーへと至る系譜は、一方では、アウグスティヌス神学の正統な後継とみなされ、また一方では逆に、彼らによってもたらされた混乱と、正統アウグスティヌス神学からの逸脱が指摘された。本書の著者によって強調されるのは、こういった視点に基づいた認識で

はなく、ジャンセニスム運動をカトリックの再構築運動にともなう必然としてとらえる考え方である。宗教改革は、自律性を増す世俗世界に対応して、神の絶対性すら再評価することを余儀なくさせた。ジャンセニスムをめぐる論争の起源は、仲介者としての教会という理念にたいする攻撃への反応であるトリエント公会議、すなわち教義の再定義の場であり、この観点においては、もはやアウグスティヌス神学との関係の「正統性」は問題とならない。すなわちジャンセニスム運動は改革であるのと全く同時に対抗改革であり、さらに正確にいうならば、それは「対抗改革の中の改革」であった。

本書はまず、このジャンセニスム運動において、特に一八世紀のジャンセニスム運動がもつ独自性を明らかにしようとするが、これに先立ち、一八世紀のジャンセニスムをめぐる闘争の発端となった、ケネルの思想の分析がなされる。『ウニゲニトウス』が発せられる直接の原因となった著書『道徳的考察を付した仏訳新約聖書』に集約されるケネルの思想の定義について、著者は、歴史家の解釈を二つの系統に分類している。プレ克蘭、カレヴルらによれば、ケネル主義は第二次ジャンセニスム、すなわち「政治的」ジャンセニスムを準備し、その特徴はリシェリスムのガリカニスムにある。セイサン、コニエらによれば、ケネルの思想はポール・ロワイヤル主義とオラトリオ会に伝統的な思想の系列の中に含まれる。これにたいし、著者の解釈は、『道徳的考察』の独自性と、以降のジャンセニスムの転換にケネルの思想が果たした役割を認めると同時に、その思想に、ポール・ロワイヤル主義とオラトリオ会の思想の深化を見る。すなわち、ケネルの思

想の影響下で生じたジャンセニスムの教義上の変化は、リシェリスムの影響よりも、ポール・ロワイヤルとオラトリオ会に特有のキリスト中心主義的 christocentrique 解釈をさらに押し進めることによって生じた。すなわち、ケネルにとって教会の本質的機能とは、キリストの言葉の普及であり、真理 *la vérité* の保護であった。教会のヒエラルヒーは保たれなくてはならないが、その裁きは、教皇の気まぐれや個人的見解でなされてはならないものである。従って一般信者には、教会における決定権は与えられないものの、教会の悪や真理の危機に際して、キリストの神秘体の内部で真理のために戦う「真理の証人」としての役割が付与された。彼はまた、ジャンセニストの迫害をキリストの受難、聖人の殉教と関連づけてゆく過程で、聖書の予言の真理を強調する歴史神学に近づき、教会の現在と未来は、聖書の研究において神が人間に与えた道筋をたどることによって知ることができると考えた。『道徳的考察』には、ウルトラモンタニスムを掲げるイエズス会にたいする間接的、暗示的攻撃が数多く見られるが、このイエズス会とジャンセニストのあいだの闘争は、真理の守護者、聖人にたいする迫害と殉教の歴史のなかに組み込まれた。こうしたケネルの解釈には、一八世紀、ジャンセニスムに新しい展開をもたらした旧約象徴論 *typology* の歴史神学の萌芽が見られるが、彼の著作においては、その解釈はもっぱらイエズス会への攻撃に利用されるにとどまった。この聖書解釈の神学に論理的・一貫性を与え、歴史神学として完成させたのは、ケネルとともにアルノーのもとへやってきたオラトリオ会士、ジャック・ル・ジョゼフ・デュゲであり、彼は、新約聖書において成し遂

げられる事象のすべては、旧約聖書に「前兆」figureとして現れているとする旧約象徴論とその歴史神学を深化させた。彼の旧約象徴論は、神と教会の聖なる歴史を理論的に防衛しようとする護教論的性質に特徴づけられ、その神学はかたちを変えながらも、弟子であるアベ・デトマールに引き継がれた。

『ウニゲニトウス』が公示されて以降のジャンセニスムについて、プレ克蘭らはそれを「政治的ジャンセニスム」と定義し、高等法院の立場と、その政治的アピールの道具としての観点から解釈してきた。これにたいして本書は、一八世紀の初頭にはもはや「小さな集団」であったジャンセニストが、いかにして幅広い社会層に「文化的受容」aculturationを起し得たのかという問題を中心にすえ、一八世紀のジャンセニスムの特性を明らかにしようとしている。その際まず、一八世紀のジャンセニスムが一七世紀のジャンセニスムといかなる関係にあったかが示され、次に、「文化的受容」を可能にしたところの一八世紀ジャンセニスムの神学的特性が明らかにされる。

一七一五年から最初の二年間は、摂政オルレアン公は明らかにジャンセニストにたいして好意的であった。しかしながら、妥協の試みは決して実現することはなかった。ルイ一四世期には、王によって強力に指揮された想像上の「反ジャンセニスム」に妨げられたのにたいして、今回は、ポール・ロワイヤルの「記憶」に連なる神学者たちの真正銘の党派によつて、妥協の試みはことごとくつぶされることとなる。彼らの活動の中心地であったオラトリオ会系のサン・マグロワール修道院と、そこに属する神学者たちは、自らをポール・ロワイヤル

の後継者とみなしていたが、そのジャンセニスムとの連続性は、「兄弟」のようなものであった、ケネル、デュゲのジャンセニスムとの関係とは異なり、決して自明のものではなかった。著者によれば、このつながりは過去への「再発見」の試みによつて新たに作り上げられたものであり、またこの試みなくしては、一八世紀の上訴運動が、ポール・ロワイヤルがよつて立つ地平と同じ地平で語られることは決まらなかった。こうした運動の中心となったのが、旧約象徴論の熱心な信奉者であるアベ・デトマールである。サン・マグロワールを中心に活動したデトマールは、その歴大な著作の中で、恩寵をめぐるジャンセニストの初期の闘争から、ジャンセニスムに関係する闘争への高等法院の関与の深化までを一連の流れとして位置づけ、一八世紀におけるジャンセニストの抵抗の前提を作り上げた。その中で、ポール・ロワイヤルは不屈の抵抗の象徴として、理想化され、神話化されたかたちで再発見された。彼らは、ポール・ロワイヤルという象徴を掲げるとともに、教会における「真理の守護者」としてのその役割も、自らのうちに見いだしたが、これは直接的に、一七一七年にはじまる公会議への一連の上訴運動を準備したのである。従つて、一七世紀における「隠者のジャンセニスム」と、一八世紀における「上訴のジャンセニスム」、「高等法院のジャンセニスム」のあいだには、「宗教的」ジャンセニスムから「政治的」ジャンセニスムへの変化というとらえ方には単純に帰し難い、断絶と「連続性」が存在していた。

著者は、このように新たなかたちをもつて現れた一八世紀のジャンセニスムを特徴づける要素として旧約象徴論と「真理の証言」を挙げ

るが、このうち旧約象徴論とそれに特有の歴史神学は、デトマールに指揮された「再発見」の思想的根拠となり、『ウニゲニトウス』にたいする抵抗の、神学的な母体になったとされる。旧約象徴論は、サン・ブーヴ以降一般に考えられているような、「至福千年説」をとる異端でも、寓意解釈の傾向を再びとうとする尚古主義でもない。もともとその起源は、歴史的な知識の進歩、特に聖書考証学の進歩によって、宗教的良心に提示された新たな疑問に答えようとすることにあり、その関心事は、聖なる歴史の枠内に世俗の歴史をとどめておくことにあった。このデュゲの思想に代表される護教的な性格は一八世紀、上訴というジャンセニストの行動を正当化するために、デトマールによってより論争的なものに形を変えた。すなわち、世俗の歴史は、聖書の記述の象徴的かつ不定の繰り返しに過ぎず、その記述に照らし合わせることで、「前兆となる出来事」*les affaires du temps*を知ることができるという強力な注釈学である。これは、神聖化された歴史のエピソードを、読解の力によって現代に感覚的に呼び覚ますという行為を、「受け入れられるもの」とした。この思想は前述のように、一八世紀のジャンセニストたちが、一七世紀の隠者たちの直接的な、また本質的な後継者でないにもかかわらず、一七世紀のポール・ロワイヤルを反射し、作り直し、理想化した形で、一八世紀のジャンセニスムのアイデンティティをよみがえらせた。その意味で、「過去の論争の記憶」が『ウニゲニトウス』にたいする抵抗を導いたのである。

一方「真理の証言」は、旧約象徴論の歴史神学に対応する教会の概

念を素描した書物で、一七一四年オラトリオ会士であるヴィヴィアン・ド・ラ・ボルドによって著された『教会における真理の証言』に依っている。ボルドはこの中で、「あやまちが神の家の中にまですでに浸透している場合、いかにして教会をその支配から救い、守ればよいのか」という命題にたいする答えとして、教会における「選ばれた」少数者の権利を強調する教会論を展開する。旧約象徴論の歴史神学は、ジャンセニストを殉教者、真理の守護者として示してきたが、腐敗した教会において真理を守るのは、彼によればこの「少数者」であった。ジャンセニストたちは、プロテスタントに接近しているという批判にたいして、自らの正統性を主張するのに苦心してきたが、この教会論も、あくまで教会内部で真理の陰りを告発しながら、その真理はただキリストの言葉のみに依拠するという微妙なバランスのうえに成り立っていた。このボルドの思想は、「本質的な真理について民衆は証言を行う義務がある」としたデトマールの主張とともに、発表当初はほとんど反響を呼ばなかったが、『ウニゲニトウス』をまさにキリストの言葉にたいする攻撃とみなすジャンセニストたちの抵抗運動の過程で、徐々に彼らの抵抗を支える原理となっていく。その点で、この教会論は、『ウニゲニトウス』によって引き起こされた闘争におけるジャンセニストの利害、関心に合致して初めてジャンセニストの教会論となり得たといえる。こうした考え方に加え、ボルドが「神のための訴え」という觀念に基づいて、「公衆の裁き」*tribunal du public*を促したことは、少数派であるジャンセニストたちの上訴運動の正当化に貢献した。一七二〇年、再上訴の失敗によって、「上訴派」

聖職者のうち数人が離脱すると、最終的な証人である一般信者へ訴えかけようとするこの動きは、一層強化された。事実、『ウニゲニトウス』にたいする「世論」*opinion publique*の高まりは全くフランスに特有の現象で、司祭や一般信徒でさえ、ほとんど司教と同じ資格で、教義の裁断者になったような気分を感じたものだが、従って、『ウニゲニトウス』をめぐる闘争の桁外れの公開性は、自然発生的なものとは程遠かった。ジャンセニストたちは、こうした思想を積極的に利用することで、教会内部における少数派であるにもかかわらず、「世論」を論争に巻き込み、そのうちの一部を味方につけることに成功したのである。

旧約象徴論と「真理の証言」の思想は、『ウニゲニトウス』をめぐる闘争の下で、互いに影響を与えながら平行して進化し、批判的精神の出現と世論の教化に貢献した。これらの考え方は、また、宗教闘争の移動の基礎づくりを行い、原政治化 *Proto-politisation* された形態を創出した。著者は、こうした前提が、続いて高等法院を主役とした政治闘争の場を準備したと主張している。

二

一八世紀の絶対王政の動揺に関して「ジャンセニスム」が何らかの影響を及ぼしたという点については、依然多くの研究において意見が一致している。しかしながら、それ自体十分に定義されていない「ジャンセニスム」が実際に影響を及ぼし得た範囲と、その役割については、近年の研究の進展にもかかわらず明確にされていない。この

主題に関する研究の多くは、現在も、リシェリスムの概念に立脚したエドモン・ブレ克蘭の主張にとどまっている。リシェリスムは、一七世紀初頭、エドモン・リシェによって唱導された思想で、イエズス会とガリカニスムの争いの中で生み出された主張であった。先鋭的なガリカニスムと、啓示された真理の高位聖職者による独占の否定に特徴づけられるこの思想は、特に第二身分出身の司祭階級に恩恵を与えてきたが、ブレ克蘭らは特に、一八世紀におけるジャンセニスムの変化をリシェリスムの影響と結びつけて考えた。

こうしたリシェリスムの概念に基づくとらえ方は、一八世紀におけるジャンセニスム自体の性質の変化に直接言及せずに、「宗教的」ジャンセニスムから「政治的」ジャンセニスムへの移行を説明しようとする試みであった。こうした主張においては、教皇庁の主導で発せられた『ウニゲニトウス』にたいして、高等法院のガリカニスムと司祭たち一般聖職者のジャンセニスムに存在したガリカンの感情の同盟が成立したことは、いわば自然の成り行きであり、そのうえでこの活動の場も高等法院という政治的領域へと移行したと考えられた。この場合、高等法院という集団の依って立つ原理は政治行動の方向性によって決定され、高等法院のジャンセニスムがもつ固有の特徴といった側面はもはや問われることはなかった。それは、いくつかの要素からなるあいまいな「イデオロギー・ブロック」であり、サン・ブーヴが指摘するように「一八世紀の高等法院のジャンセニスムはもはやポール・ロワイヤルとはつながりをもたず、イエズス会への敵意のみによってつながっているもの」として扱われた。こうした解釈におい

ては当然、ジャンセニスム自体の神学の歴史や、神学者と政治家の関係も問われることがなかったのである。

これにたいして本書で提起されるのは、教義上の枠組みが、高等法院という機構の一八世紀における政治的行動を制御するという、新しい視点である。またその際、ジャンセニストの党派において個人の果たした役割や、人間のつながりのあり方が重視される。すなわち、一七一七年、四名の司教によって『ウニゲニトウス』が一般司教会議 *concile general* に上訴されてから、一七三〇年、『ウニゲニトウス』が国王宣言によって国法に定められるまでのあいだに、教書を受容しようとする動きにたいする抵抗は急速に政治化していくが、闘争の政治的領域への移動によって、司法官と弁護士という新しい社会的グループが、ジャンセニストの党派の中で中心的役割を担い始める。彼らは、教会内における抵抗の神学である旧約象徴論を、政治的抵抗のモデルに転化して、高等法院を闘争へと突き動かした。この多くとも六〇人、少なければ二〇人程の集団は、家族的な伝統のもとに代々引き継がれてきた、熱心なポール・ロワイヤリストだけでなく、コンヴァルシオン派の支持者、自由思想家など、多様な種類の人間を含んでいたが、闘争の過程で、ポール・ロワイヤルという象徴的な旗の下に集い、高等法院の抵抗を先導することとなった。この「キリスト教徒のオーケストラ」とでもいうべきような集団の「指揮者」として著者が注目するのが、旧約象徴論者の弁護士、ルイ・アドリアン・ルページである。

ルページの著作活動は、抵抗運動が政治的領域へと移動する一七三

〇年ごろに始まり、闘争が宗教的文脈から完全に外れる一七七〇年ごろまで続く。都合一〇〇以上の書物や小冊子を著したが、一七五二年から一七七二年までのパリ高等法院の闘争に係する文書、パリ高等法院の方針や計画についてまとめた文書のほとんどすべてが彼の手によるものであった。こうした活動から、ルページは、研究者たちによって、驚くべき陰謀家、あるいは先駆的で偉大な革命家という相反するイメージと評価を与えられてきた。これにたいし本書では、彼は、これらの評価がいずれも前提とする、絶対主義にたいする反対者ではなく、絶対主義の厳格な擁護者であり、その中でも、最も急進的な一人とみなされる。

ところで、ここでいう「絶対主義」とは、当然のことながら、革命の「断絶」から相対的に浮かび上がる、過去の王政と専制を示す絶対主義とは異なる。また、現在広く認知されている概念、すなわち封建王政から「絶対」王政への移行に伴う、王の行政機関への大諸侯の服従、暴力の独占の確立、私闘の消滅などの社会的変容とその結果を指し示す概念としても、この用語は使用されない。本書が依拠するのは、王の「絶対的な」権威の原理としての絶対主義である。この考え方は、最も古くは、皇帝の権威に関するローマのモデルがよみがえる一二世紀ごろまで溯り、宗教戦争の直後、すなわち一六世紀末から一七世紀初頭に第二の生を得た。この時、神授権が再発見されると同時に、精神的権威にたいする地上の権利の優越性が確認され、王と司法官は教会の仲介なしに神の承認を保持し得るようになる。著者によると、ルページは、この「国家理性」 *raison d'état* があらゆる宗教的

動機にたいして優先するに至った時代、ボダン以来の国政論に独自の解釈を加えた。彼の解釈では、神授説に基づいて主権者である王の権威にたいして、いかなる制度上の制限も加えられない以上、制限は王の権威のその内部にしか存在し得ない。そして、ルページにとって王の権威の内部に存在する制限者とは、高等法院において考えられなかった。彼自身の言葉を借りれば、高等法院は国家において社団を形成するのではなく、絶対主義の「本質的機能」を王政の精神に最も親密なかたちで果たすものであった。したがってルページの理論では、高等法院の抵抗は、絶対主義に対する反対でなく、絶対主義の擁護という文脈においてまさに正当化されたのである。

本書のもう一つの重大な指摘は、この理論が、教会における妥協しない、しかしながら従属的な反対者であったジャンセニストによる、自らの困難な立場を正当化しようとする過程で生み出された教会論モデルの政治的領域への移動によって、作り出されたという点にある。本稿の一で示したように、「対抗改革の中の改革」運動であったジャンセニスムは、一八世紀、旧約象徴論の影響を受けて「少数者」にたいする「真理の委託」 *dépôt de la vérité* というモデルを作り上げ、教会内部におけるジャンセニストの真理のための戦いを正当化した。ルページは、これを王権の絶対的権威とその制限者という政治的な構図へと転化して、絶対主義内において「本質的機能」を果たす高等法院というモデルを生み出した。また、ジャンセニストは、イエズス会を教会内の退廃を加速させる悪の根源として厳しく糾弾したが、このモデルが、旧約象徴論者の歴史神学の鏡によって反射され、一八世紀

半ば以降の、王権と高等法院の闘争の場を規定したのである。『ウニゲニトウス』からモーブーの改革まで、ジャンセニストの闘争というファクターから事件の連続性を明らかにしようとする試みは、現在まで成功していないように思えるが、これは、著者によれば、事件の連続性を、宗教的場から政治的場への反射、移動という「意味」の不連続性がつらぬいているためである。

冒頭の論点に戻るが、もしジャンセニスムが一八世紀の王権の動揺に関して、そして革命に関して何らかの役割を果たしているとするれば、それは、アングロサクソン系の研究とこれまでの多くの研究が示しているような、絶対主義にたいする反対者としての立場、すなわち立憲主義という絶対主義の外部に存在する立場に依拠したものでは決してない。確かにジャンセニスムは、自らの変化を志向した王と国家のあいだの距離を広げることに貢献し、多くの研究がそこにルページの著作とルソーの著作のあいだのシンメトリーを見いだしてきた。しかし、ルページ自身は、あくまで王政における「本質的機能」というその特性を高等法院が完全に発揮することによって、王と国家が和解することを望んでいたのである。このことが結果的に王の主権のひびを深化させたとしても、それはルソーが民主主義的变化の止揚と考えたところの現象では決してなかった。

ジャンセニストたちは、まさに「絶対主義」を擁護しようとすることをつうじて、代議制や自由主義的な体勢に向けての絶対王政の性質の変化を妨げた。彼らは、モーブーの改革で計画された組織にせよ、他の組織にせよ絶対王政の内部に法の下での均衡を実現し得たかもし

れないあらゆる機関の設立を妨害したのである。王に改革の余地を与えず、絶対主義を矛盾の中に追い込み、内部の矛盾をさらに激化させた、ただその意味においては、彼らは確かに「革命的な」勢力であった。

おわりに

以上、本書では第一に、「偉大なる世紀」における「隠者の」ジャンセニスムにたいし、「啓蒙の世紀」における「上訴の」ジャンセニスムが、旧約象徴論と「真理の証言」を柱として、固有の様態をもつて現れてきたことが明らかにされた。また第二に、一八世紀中葉、『ウニゲニトウス』をめぐる闘争の場が政治的領域に移動した際、政治行動を制御する教義上の枠組みが、「上訴の」ジャンセニスムから一貫して存在したことも明らかにされた。最後に、高等法院の王権にたいする抵抗の思想が、ジャンセニストによってあらかじめ練り上げられ、使用された教会論を政治的領域に転化し、作り上げられたものであることも指摘された。

著者の興味は一貫して、ジャンセニスムの固有の神学自体が人間の行為に政治にいかなる影響を与え、また与えられたかという点にあるが、これは、信仰心の衰退という側面や、政治的な闘争の側からの観点で語られることの多かった、一八世紀の教会史、および宗教と政治の関係に新しい光を当てたと言える。また、一八世紀における王権の動揺を、絶対主義の進展にともなう構造的矛盾の増大という観点でとらえ、そこに神学的、精神的骨格を与えたことによって、本書は狭

義の「宗教史」の範疇を超え、広く一八世紀における絶対主義の変容の構造を問う直そうとする論考となっているのである。